

1937年・新聞から見る ヘレン・ケラー朝鮮「講演旅行」

鈴木 久美

1 はじめに一ヘレン・ケラー日本に来る

「見えない、聞こえない、話せない」、三重苦の奇跡の人として著名なヘレン・ケラー（1880年～1968年）⁽¹⁾は、1937年（昭和12年）はじめて日本を訪れた。この時にヘレン・ケラーが滞在した期間は、1937年4月15日～8月10日の約4ヶ月間で、そのうちの7月12日～17日は朝鮮に滞在していた⁽²⁾と記録にある。

具体的な滞在先は、「ヘレン・ケラー女史全日本巡回講演日程表」⁽³⁾から確認できる。以下に「都市名」と「日時」をまとめておこう。

東京	4月15日～18日
大阪	4月19日～24日
東京	4月25日～30日
横須賀	5月2日
鎌倉	5月2日
静岡	5月4日～5日
名古屋	5月5日～6日
彦根	5月7日
大津	5月7日
京都	5月8日～10日
奈良	5月10日～13日
神戸	5月14日～20日

(2)

岡 山	5 月21日～22日
広 島	5 月22日～24日
下 関	5 月24日～26日
福 岡	5 月26日～28日
長 崎	5 月28日～29日
熊 本	5 月31日～6 月 1 日
大 分	6 月 2 日～ 5 日
岐 阜	6 月 8 日～ 9 日
金 沢	6 月 9 日～10日
長 岡	6 月10日～11日
新 潟	6 月11日～12日
秋 田	6 月12日～16日
弘 前	6 月16日～17日
青 森	6 月17日～18日
函 館	6 月18日～22日
小 樽	6 月22日～23日
札 幌	6 月23日～25日
盛 岡	6 月28日～30日
仙 台	6 月30日～7 月 2 日
福 島	7 月 2 日～ 3 日
水 戸	7 月 3 日～ 4 日
朝鮮 大邱	7 月12日
京城	7 月12日～15日
平壤	7 月15日～17日
満州 安東	7 月17日～18日
奉天	7 月18日～21日
大連	7 月21日～26日

※出所：岩橋英行『社会福祉法人 日本ライトハウス40年史』社会福祉法人 日

(3)

本ライトハウス、1962年、9頁～11頁、「ヘレン・ケラー女史全日本巡回講演日程表」(昭和12年)より、「都市名」と「日時」を抜粋し作成。

ヘレン・ケラーが日本へ来ることになったきっかけのひとつに、彼女の日本滞在中に通訳として同行した岩橋武夫の存在があった。岩橋武夫(1898年～1954年)は、今日の社会福祉に貢献した「愛盲の使徒」と称される人物である。⁽⁴⁾

岩橋武夫は早稲田大学工学部在学中、19歳の時に風邪がもとで高熱をだし網膜剥離をおこし失明した。⁽⁵⁾失明したことで岩橋武夫は早稲田大学を退学した。その後1925年(大正14年)27歳の時に英国エジンバラ大学に留学し、卒業後はロンドンで社会福祉を勉強したという。⁽⁶⁾日本帰国後は社会福祉事業や教育に力をそそぎ、例えば視覚障害者には自宅を開放して蔵書の点字図書の貸出しを始めた。⁽⁷⁾

それでは岩橋武夫はヘレン・ケラーと、いつ、どこで出会ったのだろうか。『往復書簡 日本の障害者福祉の礎(いしずえ)となったヘレン・ケラー女史と岩橋武夫』(社会福祉法人日本ライトハウス、2012年。以下、『往復書簡』と記す。)には、岩橋武夫とヘレン・ケラーの年表、書簡、写真、新聞記事などが収録されている。この『往復書簡』から見てみよう。

『往復書簡』に収録されている年表を見ると、岩橋武夫とヘレン・ケラーの出会いは、1934年(昭和9年)12月、岩橋武夫がヘレン・ケラーの自宅を訪ねた事から交流が始まったとみられる。この時に岩橋武夫はヘレン・ケラーに日本訪問を要請した。⁽⁸⁾だがヘレン・ケラーの日本訪問はすぐには実現しなかった。その理由は、サリバン先生ことアン・サリバン(1866年～1936年)が、1936年(昭和11年)に亡くなったことが影響していた。それでも岩橋武夫は、ヘレン・ケラーに慰めの言葉と共に日本への訪問を再度促す手紙を送り、この手紙がきっかけとなりヘレン・ケラーは日本行きを決断したようである。⁽⁹⁾

ヘレン・ケラーが日本行きを決めると、1937年3月20日、当時の米国大統領フランクリン・ルーズベルトからメッセージが届いたという。メッセージは『往復書簡』に収録されているので以下に記しておく。

(4)

「ミス アダムス・ケラー 様

私はあなたの日本訪問が肉体的障害に悩みつつある日本人にとって、永続的な靈感となることを信じて疑いません。そしてまた、たとえ短期間であるにしてもあなたと日本における人道的事業に関心をもつ、個人および団体との交流が日米国民における友情と善意とを促進し、それにもとづいて、良き国際間の関係が成立することを深く信ずるところであります。

あなたはアメリカ国民に対する、心からなる挨拶を伝えるのに最もふさわしい資格ある方と考え、私はこの機会に今回のあなたの使命が成就せられんことを切望してやみません。」(注：当時の訳文)⁽¹⁰⁾

フランクリン・ルーズベルト大統領がヘレン・ケラーに送ったメッセージを見ると、ヘレン・ケラーの日本行きはたんに個人的な「旅行」ではなかったようだ。それは次に見るヘレン・ケラーの日本「講演旅行」の日程からもわかる。

例えば、1937年4月15日、ヘレン・ケラーが浅間丸(横浜港に入港)で日本へやって来た時に、『東京朝日新聞』(1937年4月16日)には、横浜港から日米両国旗を飾った自動車3台を連ねて上京、午後4時帝国ホテルに入った⁽¹¹⁾とある。日本到着の翌日、16日の日程は、午前中は米国大使館を訪問し、午後には新宿御苑の観桜御会に参列して天皇・皇后両陛下と握手をしたとある⁽¹²⁾。

また、『東京朝日新聞』(1937年4月14日)には、4月17日に日比谷公会堂で「市民歓迎会」が行われるという広告が掲載されており、「主催」の欄を見ると、「東京市・東京連合婦人会・東京朝日新聞社」とある。さらに日比谷公会堂「市民歓迎会」の翌日4月18日には、「ヘレン・ケラー女史歓迎晩餐会」が開かれていた。晩餐会のプログラムは『往復書簡』に収録されているので見ると、歓迎の挨拶は徳川家達、歓迎の辞には総理大臣兼文部大臣・林銑十郎、その他にも内務大臣・外務大臣・東京府知事・東京市長・米国大使などの名前がある。⁽¹³⁾

これらの日程を見ても、ヘレン・ケラーの日本行きは岩橋武夫が個人的に計画をしたたんなる「旅行」とはいえないだろう。これまでもヘレン・ケラーの第1回目の日本行きは、日米間における政治的な意味合い、つまり日米和平工作⁽¹⁴⁾であったという見方もされている。だが本稿では、「日米和平工作」につ

(5)

いての検証はせずに、朝鮮におけるヘレン・ケラー「講演旅行」に関する当時の新聞記事を探して見ていきたい。

それでは、1頁～2頁に記した「ヘレン・ケラー女史全日本巡回講演日程表」から確認したように、ヘレン・ケラーは日本内地⁽¹⁵⁾を巡回したあと朝鮮に行った。次に朝鮮におけるヘレン・ケラーの「講演旅行」の日程内容を新聞から見ていこう。

[凡例]

- (1) 新聞記事や文献内容の表現は、歴史的な意義を考え、直さずそのまま記した。但し、引用した内容の太字は筆者によるものである。
- (2) 「□」は判読不明の文字である。

2 新聞から見るヘレン・ケラー朝鮮「講演旅行」

ヘレン・ケラーは1937年7月11日の朝、下関から関釜連絡船に乗り釜山へ向かった。⁽¹⁶⁾ 同日、釜山に入港し下船後、鉄道会館で1泊したという。⁽¹⁷⁾ このあとの朝鮮における日程は『大阪朝日新聞 朝鮮西北版』(1937年7月11日)に掲載されているので確認しておこう。

「”三重苦の聖女”ヘレン・ケラー女子は11日釜山入港の関釜連絡船で来鮮するが、釜山では防空演習の関係上講演は行わず、11日夜は鉄道会館で1泊、12日午前7時半頃の「のぞみ」で大邱に向う、女史は同9時45分大邱着公会堂ホテルで小憩後、同10時半から正午まで公会堂大ホールの演壇に立って府民にまみえるが・・・(以下省略)」

「”奇跡の声”日程

12日 午前10時半大衆講演会、大邱公会堂、12日午後10時35分京城着

13日 午後4時20分、府民館において教育者関係講演会(全鮮ヘラジオ放送)

(6)

14日 午後1時30分 府民館において婦人講演会、午後7時30分府民館において一般大衆講演会（会員券50銭）

15日 午前11時済生院聾啞部訪問、午後3時35分京城駅発平壤へ向う

16日 午前10時、平壤崇実専門学校講堂で教育者講演会、午後7時公会堂で一般講演会」⁽¹⁸⁾

日程にあるようにヘレン・ケラーは7月11日の夜、釜山に上陸した。上陸後すぐにヘレン・ケラーは新聞記者団を前に会見を開いた。この時の会見内容と釜山に上陸した時の様子（ヘレン・ケラーと秘書のトムソンの写真あり）が、7月12日の『毎日申報』に掲載されているので見てみよう。なお、これよりヘレン・ケラーの日程内容や新聞記者団とのやり取りは、朝鮮語で書かれている『毎日申報』を使う。当時朝鮮では、『毎日申報』の他に日本語で書かれている『京城日報』もあった。ふたつのヘレン・ケラーに関する記事を比べると、『京城日報』よりも『毎日申報』の記事の方が内容や分量が充実していたからである。ちなみにふたつとも朝鮮総督府の御用新聞と言われている。⁽¹⁹⁾

「ヘレン・ケラー女史一行

釜山に上陸の第一声

朝鮮の方は慈愛に満ちているようだ。

新鮮な空気がよい。

待望の聖女

【釜山金特派員電話】

三重苦の聖女 待望の「ヘレン・ケラー」

女史はその秘書トムソン氏と通訳の岩橋氏を含め6名が11日午前6時、釜山に入港し、関釜の連絡船の興安丸で上陸した。波止場では各教会関係者と男女信徒の多数の歓迎を受け、釜山鉄道会館に寄って少し休憩した後、新聞記者団と会見し以下のように問答した。

(7)

記者) ようこそ、いらっしゃいました。今まで視察してきた日本に対する感想を話していただけますでしょうか。

ヘレン) 懐かしさを感じる朝鮮に今初上陸をして皆さまと出会ってうれしいです。日本の旅行について話すと、美しいその印象は全て表現しきれないほどです。特に感じた印象は、政府と民間をあげて私を招いてくださったそのことについて深く感謝しております。

記者) 朝鮮に上陸して最初の印象はいかがでしょうか。

ヘレン) 初めて足を運びながら感じたことは、先ほどホテルに入るまでの道端で得た印象ですが、朝鮮の方はとても慈愛に満ちているようで、新鮮な空気がとても心地良かったです。そしてホテルに来る道中で美しい花を触りながら、花を愛する朝鮮の方は慈愛に満ちた美しい心であることをうかがい知ることができました。

記者) 女史が日本に来て視察する際、特に障害者に会ってみた感想はいかがでしょうか。

ヘレン) 私が日本に来た目的は、障害を持つ人たちの環境を改善するためであります。日本は政府と民間をあげて私を歓迎するよりも、日本全体がその障害者に対する認識を変えて、その人たちの環境を向上することができるように努力してくださることを望んでおります。

以上のような意味で全ての人士たちは、私が今まで行ってきた事業に同意して障害を持つ人たちに義務教育を実施するとともに、国民として相当な待遇をしてくださることを切実に望んでおりますと、上陸の第一報の所感を語りました。」⁽²⁰⁾

ヘレン・ケラーは新聞記者団との会見後、釜山に1泊し翌朝の7月12日、大邱へ向った。大邱に到着するとヘレン・ケラーは新聞記者団に次のように語ったという。

「ヘレン女史 大邱着 談」

(8)

【大邱 李特派員電話】

「奇跡の女性ヘレン・ケラー女史は予定通り、12日午前9時40分から大邱駅着の急行列車で大邱に到着したが、同行者はトムソン秘書と通訳岩橋をはじめ、6名であり、駅には古市府尹をはじめ、各教会と愛国夫人関係者など、多数の出迎えがあった。到着してすぐ駅前公会堂で紹介された後、新聞記者団に会って以下のように語った。

朝鮮の4つの都市の1つである大邱はりんごの名産地であると聞きましたが、列車がりんご畑を通過するとき大邱のりんごが食べたかったです。朝鮮は一般の人たちの生活程度が遅れている感じがします。中でも障害者に対する優遇がないとの話を聞いて残念だと思います。しかし、障害者は失望したり悲観してはいけません。一般社会は障害者に対して優遇方法と啓蒙運動を起こさなければならない。私の経験から見ると、障害者であっても強くなりたいならいくらでも強くなれます。」⁽²¹⁾

新聞記者団との会見後ヘレン・ケラーは、午前10時30分から大邱公会堂で講演をした。「聴衆は8時から公会堂前に集まって空前の盛況を呈した。女史の意思をトムソン氏が通訳してまた岩橋氏が通訳して二重通訳で風刺「ユーモア」などが随時聴衆の熱狂を冷やした後、同12時講演を終えて」⁽²²⁾そのあとは、食事会に招待され、午後2時40分、大邱駅から列車で京城に向かった。⁽²³⁾

京城には7月12日の午後10時30分に到着した。夜遅くの到着であったが、ヘレン・ケラーは京城でも新聞記者団を前に会見を開き、次のようなやり取りをしたという。

「記者） 遠路、本当に疲れているでしょう。

ヘレン） 不幸な人々のためにやっていることなので疲れは感じません。

記者） 朝鮮に足を踏み入れたとき、空気の清新さを感じましたか。

ヘレン） はい、そうです。これまで3ヶ月間の旅行中ではじめての清新さを感じました。

(中略)

記者) 大邱はとても暑かったですか。

ヘレン) 少し暑かった気がしましたが、列車に乗って窓側からみる風光がよかったので心の中まで涼しかったです。うっそうとした樹木と美しい川の流れは良い絵を見ているようです。

記者) 朝鮮に対する話や知識はありますか。

ヘレン) アメリカで朝鮮学生たちに会い、聞いてみましたが、聞いたように美しいところであると思います。

記者) 昨年サリバン先生が亡くなった時はとても悲しかったですよね。

ヘレン) 今も時々先生を思い出し、悲しい思いは消えません。

この時、ヘレン女史とトムソン秘書は、故人となった女史の恩人を思いながら、輝く青い目に涙を留める。そして息をついた後、記者に質問をした。

ヘレン) 金剛山が有名であると聞きましたが、どのくらい距離がありますでしょうか。

記者) そんなに遠くありませんが、日程はどうなっていますでしょうか。

ヘレン) 日程的に「ホーリーマウンテン」(聖山)には行けないと思います。

記者) なるべく時間を作ってみてください。

ヘレン) そうですね。

ヘレン) ところで、朝鮮では白衣をよく着ると聞きましたが、

記者) そうです。

ヘレン) それでカササギは内地で見る物と違って白色のカササギがいるようです。

カササギの話をしなが、朝鮮特有の白色を話しているときに記者は穏やかさを感じた。

ヘレン) 朝鮮に盲聾啞たちが何人ほどいらっしゃいますでしょうか。

記者) 約2万人いるそうです。

(10)

ヘレン) その人々のための機関は？

記者) ソウルに1ヶ所ありますが、もっと施設を作らなければならないです。

ヘレン) 皆さん、ソウルにある新聞社でたくさん努力して、盲聾啞たちのために光明を与えるようにお願いします。⁽²⁴⁾

記者会見を終えたヘレン・ケラーは朝鮮ホテルに宿泊した。翌日の7月13日は、「ヘレン・ケラーは疲れがあったにもかかわらず、よく休めたようで朝7時30分に起きて、秘書トムソンに手を引かれてホテルの周辺を約20分散歩した。その後、朝の澄んだ空気を満喫してから、13日の1日の日程についてメモをし、9時に朝食をとった。」⁽²⁵⁾

朝食後ヘレン・ケラーは、午前10時15分からホテル2階の客室で京城新聞の記者らと15分ほど会見し、トムソン秘書を通して次のような1問1答を他の記者団に送ると発表した。⁽²⁶⁾

「イギリス・ロンドンに行った時、数10人の記者団と会見をして、とても深い印象をうけたが、ロンドンよりも少ない人数の京城でこのような記者団と出会ってうれしいです。自分は50年前から皆さんのような新聞記者を通して自分の仕事をしてきたので、昔の友達に接するような所懐の一端で□□の質問に応じると話した。

記者) 今日(13日)午後には講演はどのような話をする予定でしょうか。

ヘレン) 今日は社会教育方面に携わっている方々にその方面についての講演をします。

記者) 戦争についてどのように考えていますか。

ヘレン) 政治家ではありませんのでその質問はしないでください。

記者) 米州にはどのくらい多くの盲聾啞の不幸な人々がいらっしやいますか。

ヘレン) 約50万人いらっしやいます。

記者) 純粋な朝鮮の方と市街を歩きたいのではないのでしょうか。

ヘレン) 歩きたいし、朝鮮についてより知りたいです。」(27)

ヘレン・ケラーは記者団とのやり取りの他に、次のようなメッセージも発表していた。記者の談話とあわせて記しておく。

「障害者たちも文化恩典に浴せるように

ヘレン女史のメッセージ

記者団としばらく会見をしている際の女史の顔には、慈母のような純粋な愛情があふれるものが見られたし、女史の高潔で崇高な人格が表れていた。あくまで奇跡の聖母として世の中の不幸な人たちのためにたゆまぬ努力をする意志と闘気を見たので、敬仰の心懐を持つようになった。

今、女史が記者団を通じて発表したメッセージを見ると、以下のようであるが、ここにも朝鮮における不幸な人々のための多くの施設を緊急に造ることを提唱している。

朝鮮にも盲聾啞の不幸を持つ可哀相な運命の人が多いので、一日も早く彼らのために自由であり、義務的な教育機関が作られることを願っている。この不幸のゆえに涙ぐむ子どもたちに健全な□□のように教育を受けることを願うところである。このような不幸なハンディキャップを持った人々には特殊な施設が必要であるため、これらの施設を通して自力で生活することは、彼らが人生に対して感謝できるようにすることである。それはあくまで文明の恩恵を受けられるように社会の補助機関が出現することを、皆様記者団を通じて望んでいます。」⁽²⁸⁾

さらにヘレン・ケラーは、午前11時15分から他の記者団とも会見をし、そのあとは秘書トムソンと共に京城青少年の笠谷総務の案内で、11時30分、総督府の南総督と大野政務総監に挨拶をした。昼の12時30分からは朝鮮ホテルで国際親和会主催の歓迎会に出席し、午後4時30分からは府民館で一般社会教育関係者に限り講演をした。⁽²⁹⁾

ここにある国際親和会主催の歓迎会には、官民有力者の約60人が参加して和

(12)

やかな雰囲気の中かで開会されたという。ヘレン・ケラーは、「今日のような歓迎会を開催して下さったことに満身の謝意を捧げるとともに、朝鮮にいらっしゃる皆様の幸せを祈り、最後に朝鮮にいる光明を失った不幸な人にも文明の恩恵を受けるように、彼らのために多くの尽力と努力を惜しんでほしいことを心より願っています」⁽³⁰⁾と挨拶をした。歓迎会は午後2時30分に閉会した。

京城に到着して2日目の7月14日は、午後1時30分から一般夫人のために京城府民館で講演をすることになった。この日は2階、3階に団体の聴衆が780人入り、そのなかには女子高校生も参加していたという。⁽³¹⁾講演会の様子は次のようであった。

「定刻になると、涼しい白い帽子に雨服を着たヘレン女史が秘書のトムソン氏に手を引かれて登壇した。その慈悲な深い顔と神秘的な表情に、盛大な拍手が聞こえた。北島女史の開会の辞に次いで高鳳京氏のピアノ独奏があったが、ヘレン女史は高鳳京氏の演奏するピアノのリズムを、聞いたように白い手袋をはめた手でリズムを合わる神秘的な姿に聴衆はささやき始めた。続いて通訳する岩橋氏から今回の演説の趣旨説明があった後、ヘレン女史はトムソン氏と一緒に演壇に立った。

今日特に私たち、女性たちだけで話し合う機会が得られて幸いだと思うといった「ユーモア」交じりの話を冒頭に、特に皆さんは良い妻、または良い母として家庭のために努力する満点女性の人柄を遺憾なく発揮し、あくまで高貴な婦徳を高めることを望む。そしてこの地にいる多くの可哀想な人々のためにも、あなたたちの暖かい手を差し伸べ、彼らとともに人類社会の公平な幸せを育んでほしいといった、力のある話に満場は厳粛な雰囲気のうち行われ、午後2時40分頃、感激のうちに閉会した。そして今日、7時30分からは男性だけに限って第3回講演をすることになった。」⁽³²⁾

午後7時30分から始まる講演会は男性限定で行われたというが、男女に分けて講演会を行った理由はわからない。講演会終了後は尹致昊（ユンチホ）から

ヘレン・ケラーに記念品の贈呈と感謝のメッセージが送られたそうである。尹致昊（1865年～1945年）とは、忠清北道生まれで、朝鮮王朝末期から大韓帝国期にかけての政治家、啓蒙活動家である。1888年、渡米してエモリー大学などで学び、日・英・中・仏の4カ国語に通じる国際感覚を持ち、教育事業や宗教面でも活躍した人物である。日韓併合後、105人事件（寺内総督暗殺未遂事件）の首謀者として投獄された。日本統治末期には、対日協力者団体の幹部となったため、1945年8月の朝鮮解放後は親日派として指弾された。⁽³³⁾ 次に尹致昊のメッセージと記者の談話を見てみよう。

「尹致昊氏が記念品贈呈
京城府民のプレゼントとして「モリジャン」（枕元に置く筆筒）を
ヘレン女史の新しい感激

ヘレン女史の感激するほどの講演に続いて、朝鮮キリスト教青年会連合会長の尹致昊氏から感謝と□記念の意味で、朝鮮には有名な金剛山があるが、今夜世界の大きな奇跡として名を広めたヘレン博士を迎えることになったことはどうして偶然と言えようか。三重苦の暗黒をかき分けて、我々人類文化に光明をもたらすヘレン博士を心に合わせるとともに女史の事業が世界的に再び輝くことを祈りながら、□記念とする意味で流暢な英語の演説をした。そしてヘレン女史に全京城70万人の府民から、百洞装飾をした「モリジャン」と「タイプライター」1台を、トムソン秘書にもやはり「モリジャン」1台を寄贈した。ヘレン女史の喜びと感激が□□これを触れながら、今夜、この深い礼物を受ける時、その喜びを一言であらわすことは難しく、本国へ戻ってこれに触れるたびに遠く朝鮮の方々を思い出す、と感激に深い答辞があった後、京城における女史の最後の夜は印象的で、感動的な絶え間ない盛大な拍手なかで「アデュー」を告げるようになった。⁽³⁴⁾

ヘレン・ケラーは、翌7月15日、午前11時50分に南総督を訪問し、秘書トムソンに導かれて総督室に入り南総督と握手をした。この時の二人の会話は次のようであった。

(14)

「女史は全然不可能なことをただ努力によって言うようになったのは、実に人類の幸福だ。真にありがとうございますと話した。これに対して女史は、朝鮮に来て本当に文化が発達したことに驚き、京城は本当にすばらしい都会地です。過去の歴史から、そのような都会地を建設するのに使われた労苦に対して感謝するとともに、より一層朝鮮のために尽力することを願って答えて帰られた。そして南総督は15日12時に女史を倭城台官邸に招待して午餐会を開いた。」⁽³⁵⁾

午餐会のあとヘレン・ケラーは、午後2時30分に済生院盲啞部に行き、5分間ではあるが生徒を激励したとある。⁽³⁶⁾ ここにある「済生院盲啞部」とは、先行研究によると、朝鮮における官立障害者施設のことである。1913年4月、「朝鮮総督府済生院規則」（府令第41号）の発布により、従来からある養育部の外に新たに盲啞部を設けた（第1条）。そして医療部の事業を総督府医院に移管し、盲啞部は京城府西大門外養育部跡の建物において事業を開始した。初代盲啞部部長には大塚米蔵氏が就任した。⁽³⁷⁾ 次にヘレン・ケラーが済生院盲啞部を訪ねた時の様子を見てみよう。

「200人の盲啞生たちはこの聖女を迎えて感激と興奮、歓喜を持って力強い拍手をしたが、女史はトムソン氏を通じて岩橋氏の通訳と盲啞部先生の通訳など、三重の通訳で簡単な挨拶をした。本済生院ではこの歴史的に珍しい客を迎え感激して盲啞部の女生たちが丹精を集めて作った「スパンソク（繡座布団）」一つと盲部生徒たちが点字で綴った歓迎の作文集を贈呈すると、女史は感激して、世の中にありとあらゆる礼物として感謝し、皆様の温かい心によって作られたこの座布団を大切に使う。この作文はどこを旅行する時にもこれを読みながら友にする、と感謝があふれる答辞をして記念撮影をしたが、このすべての情景は実に涙ぐましいものがある。」⁽³⁸⁾

ヘレン・ケラーは200人余りの生徒と周辺に集まった数百人の観衆と挨拶を

交わし、済生院盲啞部をあとにして午後 3 時35分の列車「のぞみ」号で京城駅を発ち平壤に向かった。⁽³⁹⁾

7月16日は平壤に滞在して講演会を行った。翌17日は、『京城日報』（1937年7月17日）によれば、ヘレン・ケラーは満州へ向い、満州滞在後は日本内地に戻り、8月10日、横浜港から秩父丸で帰国する予定であると記されている。⁽⁴⁰⁾

3 おわりに

ヘレン・ケラーは1937年7月11日～17日にかけて朝鮮各地（釜山・大邱・京城・平壤）を列車で巡り、各駅に到着する度に記者会見を開き、講演活動をおこなった。障害を持ち、これほど精力的に活動を続けたヘレン・ケラーを、伝記やその他の読み物以外の新聞記事から確認できたことはひとつの成果である。成果はこの他にも、当時ヘレン・ケラーの講演会に参加してはいないが、京城師範学校の普通科に通っていたY氏の「語り」がある。Y氏の「語り」とは、筆者がY氏に、ヘレン・ケラーについて何か記憶があればおしえてほしいと、次の4つの質問をあげて送った手紙の返信である。先ず、4つの質問内容を記す。

- 「1. 当時、Yさんはヘレン・ケラーの講演を聞きましたか？
 2. もしくは、講演を聞いていなくても、ヘレン・ケラーが朝鮮の京城に来るとか、何か知っていましたか？
 3. もしも知っていたとすれば、どのような方法で知りましたか？例えば、ラジオを聞いたとか、宣伝ポスターが貼ってありそれを見たとか、先生や友人などから聞いたとか。
 4. そもそも、当時、教科書や学校でヘレン・ケラーについて教えてもらいましたか？
- 何か「ヘレン・ケラー」についてご記憶があれば教えてください。」⁽⁴¹⁾

次にY氏から届いた手紙のなかで、上述した4つの質問の回答部分とY氏の略歴を記しておく。

(16)

Y氏は、1921年6月23日大分県に生まれ、現在98歳である。5歳の時に両親とともに朝鮮全羅北道金堤に渡る。1941年京城師範学校を卒業し、国民学校の教師になり、1942年1月、現役兵として軍隊に入り、関東軍のハイラル部隊に配属した。1944年、大本營の命令で大分の陸軍少年飛行兵学校に転属し、終戦を迎えた。⁽⁴²⁾

「昭和12年7月といえば、私は京城師範学校の普通科4年の頃です。その頃京城にヘレン・ケラーさんが来たことは、うっすらと憶えています。

1. ケラーさんの講演を聞きには行きませんでした。同級生の中でも聞きに行ったという話は誰もいませんでした。
2. ヘレン・ケラーさんが京城に来るということは、新聞などで知らされていましてから、学友間でも話題にはなっていたように思います。
3. 学校の先生が授業中に、とりあげたことはないと思います。学友間の話のなかで、重い障害をもっている、努力をすれば人間とはすばらしいことができるのだといった、感想のような話をしたように思います。
4. 障害者問題について、学校生活のなかで教えられたり、研究させられたりした記憶は全くありません。

軍国主義時代に基本的人権と民主主義などの概念すら禁句であったように思います。私自身が戦後の学習のなかで初めて知り、生まれ変わったようになったのですから、止むをえないことだと思います。」⁽⁴³⁾

ヘレン・ケラーが朝鮮を巡り講演会を開催してから約80年以上も経つことを考えれば、Y氏の「語り」は貴重な記憶であり、残しておくべき資料であろう。この場をおかりしてY氏には心よりお礼申し上げる。

今後は新聞記事以外の資料を発掘し、ヘレン・ケラーが各地でおこなった講演会の詳細を明らかにできればと考えている。

〔注〕

- (1) ヘレン・アダムス・ケラー、1880年アラバマ州タスカンビア生まれ。幼い頃の病

- 気が原因で重い障害を背負いながらも、世界各地で身体障害者の教育や福祉に尽力した人物である。ヘレン・ケラー岩橋武夫訳『わたしの生涯』角川文庫、2009年。
- (2) 岩橋英行『社会福祉法人 日本ライトハウス40年史』社会福祉法人 日本ライトハウス、1962年、9頁～11頁。
- (3) 同上。「ヘレン・ケラー女史全日本巡回講演日程表」に記載されている都市名はそのママ記した。
- (4) 『往復書簡 日本の障害者福祉の礎（いしずえ）となったヘレン・ケラー女史と岩橋武夫』社会福祉法人日本ライトハウス、2012年。
- (5) 同上、7～18頁。
- (6) 同上。
- (7) 同上。
- (8) 同上、21～22頁。
- (9) 同上。サリバン先生ことアン・サリバン（1866年～1936年）はヘレン・ケラーの家庭教師である。ヘレン・ケラーに指文字や点字などを教え、教育に力をつくした人物であると言われている。
- (10) 同上、41頁。
- (11) 『東京朝日新聞』（1937年4月16日）「胸打つ“奇跡の声” 見えぬ瞳に感激の涙」
- (12) 同上。
- (13) 『東京朝日新聞』（1937年4月14日）「世界に輝く聖母」
- (14) 例えば、同前、『往復書簡 日本の障害者福祉の礎（いしずえ）となったヘレン・ケラー女史と岩橋武夫』22～23頁にある、資料「平和工作について」を参照されたい。
- (15) 「内地」とは国の領土内で、1937年当時の朝鮮は「外地」という。
- (16) 『大阪朝日新聞 南鮮版』（1937年7月11日）「ホテルにも演壇にも」（「朝日新聞外地版6「南鮮版」1937年」ゆまに書房、2007年。）
- (17) 同上。
- (18) 『大阪朝日新聞 朝鮮西北版』（1937年7月11日）「ホテルにも演壇にも」（『朝日新聞外地版7「朝鮮西北版」1937年』ゆまに書房、2007年。）
- (19) 武田幸男編『新版 世界各国史2 朝鮮史』山川出版社、2006年、274頁。秘書のポリー・トムソンは、ヘレン・ケラーの活動に長年つきそった優秀な秘書といわれている。ちなみにヘレン・ケラーは3度日本に来日しており、トムソンも3度同行していた。
- (20) 『毎日申報』（1937年7月12日）「ヘレン・ケラー女史一行釜山に上陸の第一声」（「毎

(18)

日申報」景仁文化社、1985年。）

『毎日申報』は朝鮮語で書かれているため日本語に翻訳をした。翻訳をする際に、国立精神神経医療研究センター 精神保健研究所 自殺総合対策推進センター研究員の朴恵善氏にご協力をいただいた。この場をおかりしてお礼申し上げる。

- (21)『毎日申報』(1937年7月13日)「増設することを望んでいる障害者の収容期間」
「ヘレン女史 大邱着 談」。この新聞記事にある「古市府尹」の「府尹」とは、朝鮮で府の行政事務を管掌した地方官のことである。この時の大邱府尹は古市氏であった。
- (22) 同上。
- (23) 同上。
- (24)『毎日申報』(1937年7月14日)「美しい朝鮮の風景」
- (25)『毎日申報』(1937年7月14日)「三重苦聖女の日程」
- (26) 同上。
- (27) 同上。
- (28)『毎日申報』(1937年7月14日)「障害者たちも文化恩典に浴せるように ヘレン女史のメッセージ」
- (29)『毎日申報』(1937年7月14日)「社会教育者に第一声 13日府民館で」
- (30)『毎日申報』(1937年7月14日)「国際親和会の主催 歓迎午餐会の盛況」
- (31)『毎日申報』(1937年7月15日)「ヘレン女史の入城の3日 女子のための絶叫」
- (32) 同上。
- (33)『朝鮮人物事典』大和書房、1995年、182頁。
- (34)『毎日申報』(1937年7月16日)「尹致昊氏が記念品贈呈 京城府民のプレゼントとして「モリジャン」(枕元に置く筆筒)をヘレン女史の新しい感激」
- (35) 同上。
- (36)『毎日申報』(1937年7月17日)「ともに感激をふりまく 三重苦の聖女離城」
- (37) 金龍口「朝鮮総督府済生院に関する一考察：盲啞部を中心に」229～230頁。(『九州大学大学院教育学研究紀要』、1998年、創刊号(通巻第44号)、229～242頁。)引用にある「朝鮮総督府済生院規則」については、「朝鮮総督府官報」号外(1913年4月11日)より確認した。
- (38)『毎日申報』(1937年7月17日)「さよなら、京城よ。」
- (39) 同上。
- (40)『京城日報』(1937年7月17日)「ケラー女史 上機嫌で平壤入り 半島の明朗性 絶賛」
- (41) 2019年8月7日に筆者がY氏に送った手紙の一部分である。

- (42) Y氏は筆者が主催する研究会に講師として、2018年2月11日（「朝鮮体験を語る—1926年～1941年」）と3月18日（「植民地下の朝鮮体験（続）と戦後の日朝協会の活動」）の2回、講演をしてくださった。
- (43) 2019年8月11日にY氏から筆者に届いた手紙である。

[参考文献]

- (1) 岩崎英行『社会福祉法人 日本ライトハウス40年史』日本ライトハウス、1962年。
- (2) 岩橋英行『青い鳥のうた ヘレン・ケラーと日本』日本放送出版協会、1980年。
- (3) サリバン著 遠山啓序・榎恭子訳『ヘレン・ケラーはどう教育されたか—サリバン先生の記録—』明治図書出版、2000年。
- (4) 山崎邦夫編著『年譜で読むヘレン・ケラー ひとりのアメリカ女性の生涯』明石書店、2011年。
- (5) 関宏之監修『角川まんが学習シリーズN2 まんが人物伝 ヘレン・ケラー 三重苦の奇跡の人』KADOKAWA、2019年。